Osaka University Knowledge Archive

Title	Critique From Within : Politics of Representation in Contemporary American Fiction and Theater
Author(s)	岡本, 太助
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58307
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【15】

氏　　名	岡　本　太　助（おかもたすけ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４７９３　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	Critique From Within : Politics of Representation in Contemporary American Fiction and Theater （内部からの批評ー現代アメリカ小説と演劇における表象の政治学）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　貴志　雅之 （副査） 教　授　渡辺　克昭　　文学研究科教授　市川　　明 世界言語研究センター准教授　畑田　美緒　　准教授　中村　未樹

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、一九八〇年代後半から一九九〇年代後半までに発表されたアメリカ文学作品における「表象の政治学」についての、執筆者の大学院博士後期課程入学以降の研究成果をまとめたものである。「表象の危機」が叫ばれるポストモダンの状況においては、文化生産物としての文学もまた、方法論的な難問に直面してきた。本論文では特に、政治経済その他の社会的基盤がある意味で大衆文化の文脈に包摂され、また国民的アイデンティティー創出の根幹たる歴史意識がはなはだしく弱体化するなかで、アメリカの文化と歴史を、アメリカ文学がいかにして物語化してゆけるのかという問いを立て、小説と演劇という二つのジャンルを比較検討しながら、現代アメリカ文学におけるひとつの傾向を読みとくことを目指す。

イントロダクションでは、まず「表象の危機」について解説し、現代アメリカにおける歴史意識と国民的アイデンティティーとの関わりにおける、その概念の重要性を説明する。続いて、文化批評や文学批評の文献を参考にしながら、ポストモダンにおいては、現実世界を写し取る形式の表象が影を潜めたが、物語としての歴史表象や文化表象自体の需要は増大していることを確認する。本論文の中心テーマである現代アメリカ文学の「表象の政治学」を明確に提示するために、表象の正確さよりもその政治的・文学的有効性へと議論の重心をシフトさせ、さらに今回研究対象とする作品といわゆる「ポストモダン文学」との差別化を図るために、前者における文学的表象が個人と世界の、あるいは作品とそれを取り巻く社会的・文化的状況との関係性を描き出し、また実演するものである点を強調する。そうした意味において、これらの作品のとる戦略は、対象との距離をとって遠くからあるいはその外部から表象を行うものというよりは、その対象と作品それ自体のつながりを、そのつながりそのものの中に身を置く形で描き出し、またそれを批判し評価するものであるということができる。本論文では、現代アメリカ文学に顕著なそうした表象戦略を「内部からの批評」というタームで提示する。以下の各章では、作品を個別に論じながら、それらの間の差異や共通項を明らかにしながら、現代アメリカ文学における新たな表象モードの有効性について考察してゆく。

第一章では、イントロダクションにおいて概説した論点を具体的に表わす作品として、Steve Ericksonの第三小説*Tours of the Black Clock*を取りあげる。幻想的な作風と大胆な歴史改変によって知られるEricksonの小説のなかでも、この作品には特に、物語を書くという行為についての自己言及的な要素が強く見受けられる。この章では、語り手JainlightとHitlerの関係を軸に論を進め、物語を書くことと歴史を作り出すことが同義となるような極限状況を、現代アメリカにおける歴史意識のあり方とパラレルを成すものであることを明らかにする。また小説における独特な時空間表象についても検討を加え、フィクションのレベルにおいても、歴史の外に立って自らが生きる世界の歴史を観察することは不可能であることを確認し、歴史あるいは物語を書くことに伴う倫理的責任について、この章における暫定的な結論を提示する。

第二章では、同じくSteve Ericksonの四作目の小説*Arc d'X*を対象に、アメリカとその歴史について書く行為そのものが、極めてアメリカ的な理念や表象形式を反復するものとなり得ることを論じる。物語はアメリカ合衆国第三代大統領Thomas Jeffersonとその奴隷であり愛人であったとされるSally Hemingsの関係を軸に、虚実入り交じる様々な時空間を移動しながら、登場人物たちがJeffersonの遺産をそれぞれに受け継ぎ、それを書き換え作り変えていく様を描き出す。本章では特にアメリカという国のテクスト性、つまり書かれたものとしての性質を浮き彫りにし、アメリカとは具体的で固定的なものではなく、そこに生きる人々がそれぞれの想いをそこに投影し、意味付けしていく終わりのないプロセスであるということを論じる。その際、アメリカのテクストを様々に異なる文脈へと結び付けその意味を複雑化する文学的メディアとしての、夢や記憶の役割に着目する。

第三章では、Richard Powersの初期二作の小説*Three Farmers on Their Way to a Dance*と*Prisoner's Dilemma*を取り上げ、初期Powers小説における「一票の政治学」というヴィジョンを提示する。これらの作品において顕著なのは、二〇世紀という戦争の時代においては、世界との関わりのなかで個々の人間の持つ重要性が減少してしまったという認識であり、失われた一票の力を回復させるために物語を復権させなければならないという作家の信念である。Powersの初期小説においては、現代に特有の社会的病理としてのアイロニーが問題とされるのだが、そこではアイロニーの克服のためにさらに別のアイロニーである小説という表象形式を用いるという矛盾がある。本章では、まず第一作における意図的なアナクロニズムをラディカルな文学的営為として捉え、人間を疎外する機械的なプロセスを文学的に再利用し、むしろ人間同士のつながりを作り出すために活用していこうとする作家の狙いを検証する。それに続き、第二作において描かれる、物語的想像力が人間関係を破壊してゆくプロセスを検討し、自由意志や理性的判断を超えた共感の力によって断絶を乗り越えようとする作家の試みについて考察する。これらの議論を通して、Powersによるアナクロニズムやアイロニーの批判的使用が、先鋭的な「内部からの批評」となり得ることを証明する。

第四章では、二〇世紀アメリカ演劇の最高傑作と目されるTony Kushnerの大作*Angels in America*を、Guy Debordらが唱えた大量消費社会における「スペクタクル」と共犯的な関係を結ぶものと捉え、そのうえでなお作品が持ち得る批判的機能とはいかなるものかについて考察する。特に作品における天使の表象のスペクタクル性を重点的に検証し、演劇作品としての*Angels in America*が用いるスペクタクルが、先述したスペクタクルと微妙に異なりつつも、表象の形式とその効果の点において極めて似通っていることを示す。また同性愛やエイズといった人間身体に関わる「国家的テーマ」を扱う同作品が、その表現形式の点では「ゲイ・ファンタジア」を標榜していることを問題とし、作品における同性愛の身体表象の有効性についても、批評言説の歴史的変遷を踏まえつつ論じていく。章の後半から結論部にかけて、本来は同性愛者に対する蔑みである「クイア」という呼称を、*Angels in America*におけるスペクタクルとDebord的スペクタクルの奇妙な関係を表すものとして再定義し、本作品の「内部からの批評」の特質を明らかにする。

第五章では、斬新な劇作法によって現代アメリカ演劇を牽引するSuzan-Lori Parksの戯曲*The America Play*を主要テクストとし、作家の用いる表象形式と現代アメリカ文化を特徴づける視覚的イメージ主導の歴史表象の関連を探る。「反復と改訂」と名付けられたParksの劇作法においては、既存の素材が再利用されるとともに、微妙な差異が生み出される。またそうした表現形式それ自体がアフリカ由来のものであり、アフリカ系アメリカ人の口承文化と文学的伝統を特徴づけている点に注目するならば、Parksはそうした伝統それ自体に対して「反復と改訂」を行っていると見なすことができる。Lincoln暗殺を遊園地のアトラクションとして再演するこの劇では、オリジナルとコピー、公式の歴史とフィクションとしての歴史物語の間の差異が曖昧となる。本章では、公式には書き記されなかった歴史を舞台において新たに創り出すParksの試みを、その「表象の政治学」の点から再検討する。

最終第六章では、同じくSuzan-Lori Parksの最大の問題作である*Venus*について検証する。ここでは同作品が一種の演劇的プリズムであると仮定し、それ自体では把握できない歴史や社会の全体をいった

ん細部へと分解し、さらに劇の上演を通して新たな全体像を作り出すものであることを論じる。*Venus*では、一九世紀初頭にヨーロッパで見世物にされ、死後には博物学の研究サンプルとして展示されることとなったThe Hottentot VenusことSaartjie Baartmanの人生と死が再演される。この劇はBaartmanを演劇的プロセスにおいて再度断片化するものだが、それによって彼女が既に様々な言説によって解体され意味づけられてきたことが明らかにされる。また劇の上演とそれを取り巻く社会的状況との間にも別のレベルの言説空間が形成され、Baartman解体の歴史のみならず、劇の上演の現在をも含めた、西洋社会の文化的編成までもが前景化される。*Venus*はその形式面においては暴力に満ちた近現代史の流れを反復しつつも、過去を完結したものとみなさず、過去と現在のつながりを演劇的に作り出そうとする、Parksの表象戦略を明確に示している。

論文全体の結論では、イントロダクションにおいて提示したテーマについての再検討を行い、各章の議論において浮かび上がった問題点を簡潔にまとめたうえで、「内部からの批評」という観点から、アメリカ文学の今後の可能性を素描する。

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文 "Critique From Within: Politics of Representation in Contemporary American Fiction and Theater" は、1980年代後半から90年代後半にかけてのアメリカ小説と演劇作品を研究対象とした現代アメリカ文学に関する「表象の政治学」研究である。ポストモダン状況における「表象の危機」に直面したアメリカ文学が、いかにアメリカの文化と歴史を物語化することが可能になるのか。この文学の方法論を巡る重要かつ困難な問いに答えるべく、本論文は文化生産物としての文学の特性、政治経済を中心とした社会的システムの大衆文化への包摂状況、国民的アイデンティティー形成の核となる歴史意識の希薄化・弱体化問題等を巡る文学表象のあり方を検証していく。最先端の文学・文化研究と批評理論を援用し、テクストの緻密な読みと独創性ある分析・解釈に裏打ちされた各章の議論は、小説と演劇、二つのジャンル横断的な議論の重層性とともに、説得力のある刺激的結論を導き出している。

本論文は、序章と結論を含めて、８章から成り立っている。各章の構成は以下の通りである。

Introduction
Chapter 1: Architecture of the Twentieth Century: Metafictionality and Representation of Time/Space in *Tours of the Black Clock*
Chapter 2: The Pursuit of America: The Jeffersonian Legacies in *Arc d'X,* an American Writing
Chapter 3: The Politics of the Single Vote: Richard Powers's *Three Farmers on Their Way to a Dance* and *Prisoner's Dilemma*
Chapter 4: Life, Appearance, Sexuality: The Spectacle in *Angels in America*
Chapter 5: ~~What to Narrate~~, How to Narrate: A Formal Analysis of *The America Play*
Chapter 6: Prism: Fragmentation and Re-creation of Totality in *Venus*
Conclusion
Notes
References

序章では、ポストモダン状況における「表象の危機」に関する基本概念に次いで、現代アメリカにおける歴史意識と国民的アイデンティティーの関係性における同概念の重要性が論じられる。その後、文化・文学批評の先行研究の知見を踏まえ、現実世界を写し取る表象形式が減少するのに対し、物語としての歴史表象と文化表象自体に対する需要増大を示すポストモダン文学の表象傾向が提示される。以上を踏まえ、議論の焦点は本論文テーマである現代アメリカ文学の「表象の政治学」の明確化に向けた文学表象の政治的・文学的有効性の問題へとシフトする。ここでまず、本論文の研究対象となる1980年代後半から90年代の作品とそれ以前のポストモダン文学が差異化され、前者の特徴として、個人と世界、作品と作品を取り巻く社会的・文化的状況との関係性を描き、再現する文学的表象のあり方が提示される。そして、作品とジャンル自体の自己参照的／反省的態度を含め、歴史、文化の「内側から」批判的再検討を目指す傾向に着目。対象と作品のつながりを、つながりの中に身を置く形で描出し、批判・評価する現代アメリカ文学の特徴的表象戦略を「内部からの批評」と位置付け、以下の各章で、個々の作品の議論とともに、作品間の差異・共通項の比較検討を通じて、現代アメリカ文学における「内部からの批評」という新たな表象モードの有効性と政治的意義が検証・考察されていく。

第１章では、歴史の執筆に関わる問題を扱ったスティーヴ・エリクソン（Steve Erickson）の『黒い時計の旅』（*Tours of the Black Clock*, 1989）について、語り手とヒトラーとの関係を中心に、物語を書く行為と歴史の創作行為の類比的関係性に関する精緻な検証が行われる。作品のメタフィクション性と時間／空間表象の再考・検討を中心に、エリクソンの執筆行為と、過去を歴史化・物語化し、現在の政治的見地からアメリカ史書き変えを図る現代アメリカの新たな歴史主義との類比的関係性が明らかにされ、過去の忘却と再創造というダブルバインドに縛られるアメリカの国家的精神分裂状況を映し出すエリクソン作品の特徴が論証される。最終的に、物語創作においても、歴史のあり方を検証し、よりよい方向に歴史を変えるためには、歴史の中に身を置き続ける他はない、というヴィジョンを本小説は実証し、自ら記憶喪失であろうとするアメリカの姿に類似する。この点で、本作品が現代アメリカ文学における「内部からの批評」の有効性を示すものである。以上のダイナミックかつ説得力のある結論を導き出している。

第２章では、同じくエリクソンの小説『Ｘのアーチ』（*Arc d'X,* 1993 ）を扱い、合衆国第三代大統領トマス・ジェファーソンが独立宣言書に記した理念が、現代もなおアメリカの集合的精神に及ぼし続ける影響を問題とし、アメリカというテクストを巡る歴史の反復的可変性が精緻なテクスト分析によって論じられていく。ジェファーソンとその奴隷で愛人であったとされるサリー・ヘミングスの関係を軸に時空間を超えて展開する物語は、虚構と現実が複雑に交錯するなか、登場人物の夢と記憶がジェファーソンの描くアメリカのテクストに異なる意味を付与し、絶え間なく書きかえるメディアとして機能する。このようにアメリカの歴史を巡る本作品（物語）は反復的に書き変えられ改訂されるテクストとしてのアメリカとその歴史の可変的テクスト性をメタ的に描き出す。以上のように、アメリカを巡る物語と歴史創作プロセスの類比的関係性を明らかにする本章の議論は、緻密なテクストの読みと深い洞察力に裏打ちされた優れた分析として高く評価されるものである。

第３章では、リチャード・パワーズ（Richard Powers）の初期小説二作『舞踏会へ向かう三人の農夫』（*Three Farmers on Their Way to a Dance*, 1985）と『囚人のジレンマ』（*Prisoner's Dilemma*, 1988）が分析対象となり、「一票の政治学」というテーマが打ち出される。暴力に満ちた20世紀、大きな世界の現実と一人ひとりの個々の経験との間の断絶が極端に増大し、個人の声・存在はその重要性を大きく失った。上記二作は、個人の持つ一票の力を再評価し、大きなものと小さなものとの断絶を克服する試みである。その目的のために、現代の社会的病理であるアイロニーと無力感を、多様な可能性の場であるフィクションの力によって乗り越えようとするパワーズの文学的営為が明らかにされていく。第１作『舞踏会へ向かう三人の農夫』に関する議論では、まず個人的努力とその成果を信じる人物を理想とするアナクロニズムへの強い共感が本作の特徴として指摘される。そして、理想主義を時代錯誤とみなす時代の諸条件に再検討を加え、人間の自己信頼を奪う機械的世界観を逆説的に利用し、小さなものと大きなもののつながりを肯定的に捉え、人間の自己信頼と人間同士のつながりと一票の力の回復・復権を図るパワーズの試みが検証される。第２作『囚人のジレンマ』については、主人公の物語的想像力が個人を世界から切り離し、孤立状態に陥らせ、家族の人間関係を破壊する過程が精査される。そして、自由意志に基づく理性的判断が生むジレンマから脱却する方法として他者への共感の力を前景化するパワーズの試みが緻密な読みによって論証されていく。以上２作の議論を踏まえ、最終的に、アナクロニスティックな手段に訴える共感の文学こそ、パワーズの政治意識を表象した「内部からの批評」であることが説得力を持って示される。

第４章が取り上げるのは、劇作家トニー・クシュナー（Tony Kushner）のゲイ・ファンタジア大作、『エンジェルス・イン・アメリカ』（*Angels in America: A Gay Fantasia on National Themes. Part I. Millennium Approaches / Part II. Perestroika*, 1992）である。ポストモダンの大量消費社会の論理への異議申し立てと考えられる『エンジェルス』のテクストが、同様の論理を反復する表象形式を備えている点を問題とし、この「アンビヴァレンス」を、「スペクタル」をキーワードに読みほどいていく。まず、ギィ・ドゥボールを参照枠に、あらゆる社会的な生を単なる外観として肯定する大量消費社会の「スペクタクル」の特徴が明確化され、『エンジェルス』における天使降臨の姿を中心に本作品の表象形式とドゥボール的「スペクタクル」との共犯的関係が指摘される。その後、フー

コーの「生—権力」、スーザン・ソンタグのキャンプ論を援用し、キャンプ、クイアの表象戦略の議論が展開する。これにより作品のメタ演劇的スペクタクルが解明され、ドゥボール的「スペクタクル」との差異が明確化される。つまり、不可視な舞台制作プロセスを演劇的に再現・可視化することで、舞台スペクタクルのメイキングを可視化する新たなストーリーを『エンジェルス』は提示する。内と外の差異を消し去るドゥボール的「スペクタクル」に対し、『エンジェルス』は作品制作者の共同作業とその関係性によって構築される舞台という内の事実を外として見せ、常にその再確認を要請する。最終的に、作品終幕で形成される共同体の「相互の結びつき」（interconnectedness）を拡大し、本作品のクイア・メタ演劇的スペクタクルとドゥボール的スペクタクルとの結びつき、さらには世界の新たな連帯性をもたらす相互関係性こそが、本作品の政治的意義と可能性を示すという論証性と説得性のある結論に至っている。問題提起から結論に至る本章の議論は、『エンジェルス』の「内部からの批評」のメカニズムを解明した高度な創造的批評言説として評価されるものである。

第５章は、現代アメリカ演劇で最も注目されるアフリカ系アメリカ人女性劇作家スーザン＝ロリ・パークス（Suzan-Lori Parks）の劇作品『アメリカ・プレイ』（*The America Play*, 1994）を取り上げ、アメリカ正史を撹乱し、正史から排除された黒人の声を可視化する新たな歴史へと書き換えるパークスの演劇表象の政治学を考察したものである。リンカーンに瓜二つの黒人墓掘りが、歴史をコピーした歴史テーマ・パーク「歴史の大穴」のさらなるレプリカを作り、そこでリンカーンに扮し、リンカーン暗殺ショーを日々繰り返す。継続的に反復される暗殺ショーは白人大統領リンカーンと黒人墓掘りの違い、つまりオリジナルとコピー、公の歴史と偽装・虚構の歴史の差異を曖昧にし、オリジナル・テクストに変化・改訂をもたらす。このパークスの演劇戦略「反復と改訂」による歴史表象に次いで、対象のパロディー化と権力関係の再考を促すミミクリー、「反復と改訂」が根ざしたアフリカ系アメリカ人の口承文化と文学的伝統「シグニファイイン（グ）」（“Signifyin(g)”）、リンカーンおよびJFK暗殺に見られる存在の喪失による複製イメージの強化を中心に、歴史表象のあり方が再検討される。最終的に、バフチンの対話原理を現代演劇に応用したマーヴィン・カールソンの論を援用し、周縁的なものによる支配的な声の置換ではなく、両者の併置、対話のなかで、その力関係の転覆が新たな歴史表象として反復的に再現されるというパークスの「表象の政治学」についての優れた結論に至っている。

最終第６章は、同じくスーザン＝ロリ・パークスの『ヴィーナス』（*Venus*, 1996）に関する断片化と全体性をテーマとする論考である。歴史の全体を捉えるためには、全体を細部へと断片化し、断片を再び組み合わせ新たな全体像を再構築する必要がある。本章はこのプロセスを実践する『ヴィーナス』の演劇表象のあり方を分析する。作品は１９世紀初頭、特徴的身体ゆえにホッテントット・ヴィーナスとしてヨーロッパで見世物にされ、死後も研究サンプルとして博物館に展示されたアフリカ人女性、サールタイ・バートマン（Saartjie Baartman）の半生と死を映しだす。その彼女を巡る歴史テクストが舞台上で断片化され、解剖される彼女の身体と同様、西洋の言説によって搾取され、解体され、意味づけられる。そのプロセスが詳述されるとともに、劇構造、視覚効果、スペクタクル性に関する緻密な分析が展開する。そして、バートマンを演劇的／幽霊的なものとして再創造する作品上演の意味が問われ、オリジナルのコピーに憑かれてきた西欧思想史の問題が前景化される。最終的に、過去の言説とスペクタクルを反復・改訂し、過去を現在とのつながりの中で演劇化し、新たなものに創造する変化をもたらす演劇的プリズムとしてパークス劇の表象戦略を読みほどく。先行研究を超えた新たな注目すべきパークス研究として認知される、洞察に富む結論となっている。

結論部において本論文は、まず以上の作品の考察から、大きな物語の消失により外部からの観察が不可能になったポストモダン状況において、内部からの批評を除いて世界を変える道はないとの認識を示す。文学の「内部からの批評」とは、一つの暫定的解釈が他の解釈に送られ、多様な解釈の間主観的転送・交換が反復的に行われる間主観的解釈であり、文学とその成立条件である文化的・社会的コンテクストの関係性をその関係性の内側から批評する批評営為に他ならない。これが本論文テーマの全体像を集約した考えとして提示される。つまり、文学による外部＝現実の「反映」が陥っている機能不全を示す表象の危機が問題化される今、「内部と外部」という二元論モデル自体を問い直し、新たな文学的表象の可能性を探る他はない。本章はこの必要性を明確化し、今後の文学及び批評研究のあり方に一つの斬新かつ有効な表象の政治学を示す「内部からの批評」という知見を打ち出すものである。

以上が本博士論文の概観であるが、本論文は主に以下の点で学術的に高い評価を得るものである。第１に、最新の文学・文化研究、理論の成果を十分に検討したうえで領域横断的に広範かつ柔軟に組み合わせ、独創性のある現代アメリカ文学批評研究を構築した点が挙げられる。具体的には、フレデリック・ジェイムソン、ジャン＝フランソワ・リオタール他を参照枠にポストモダン文学が直面する「表象の危機」問題を捉え、同時に同問題と矛盾するかに見える現象としてアンドレアス・ハイセンが指摘した現代アメリカにおける歴史表象への欲求の高まりに着目。「表象の不可避性」と「表象の危機」が表裏一体となり、アメリカの国民的アイデンティティー、共同体の統一等の政治的課題と密接に関わる点から、「表象の政治学」研究の必然性と意義を前景化する。また、「外部は存在しない」というテーゼについて、第１章ではミハイル・バフチンの「外在性」を手掛かりに、外部に立って物語の構築を監督する作家の役割の倫理的不可能性が示され、第３章では、現実の外に立ってそれを観察・改訂することの不可能性とともに一時的なシェルターとなる物語の機能が詳解される。第４章では、ギィ・ドゥボールのスペクタクル論、フーコーの「生—権力」、スーザン・ソンタグのキャンプ論に基づき、キャンプ、クイアの表象戦略が精査される。そして、作品のメタ演劇的スペクタクルとドゥボール的「スペクタクル」との差異とともに、ポストモダン状況におけるスペクタクルの外部の不在という問題意識が検討され、その意識に対する批判はその内部において為される他ないという両者の共犯的関係の不可避性が結論を導き出している。その他、ホミ・K・バーバ、アドルノ、ヴァルター・ベンヤミンを初めとする多岐にわたる理論の的を射た援用は、論証性の高い議論をより強固でダイナミズムのあるものにしている。

第２に、本論の高度なメタ批評性は注目に値する。ミシェル・フーコーをはじめとする多くの批評家の指摘を参考に、対象とする1985年以降のアメリカ文学の際立った特徴として高度な自己参照性を問題とする。作品内表象が表象のあり方それ自体を批判的に参照する構造を持ち、作品内世界と現実世界、過去と現在、歴史とフィクションなどの境界を超えたつながり＝関係性を生み出す。つまり、文学作品が自己参照的に自らの表象行為を顧みることが、同時にその表象によって生み出される様々な関係性のあり方に対する批評ともなる。本論文はこの現象を「内部からの批評」と名付け、議論を展開していくわけだが、本論文の言語的パフォーマンス自体が対象となる現象の内側に入り込みその現象を再現しなおすという意味で「内部からの批評」言説となっている。言い換えれば、本論文そのものが自らの批評言説の表象形式を批評する、高度に洗練された重層的メタ批評となっている。

そして第３に、現代アメリカ小説と演劇という二つのジャンルを対象にし、両者を相互関連的に結ぶ現代アメリカ文学批評論を展開した点が挙げられる。欧米の研究者もなしえなかった両ジャンルの統合的研究という大いなる難問にあえて挑んだ本博士論文の野心的構想は、新たな文学批評の道を拓くものである。本論文の重要なテーマである文学「表象」の議論では、「何が」表象されるかということ以上に「いかに」表象されるか、つまり、表象の形式における意味生産に主眼が置かれる。文学的言語が表象のメディアとして機能するモードは、作家により異なる以前に小説と演劇というジャンルの違いによって特徴的な働きをする。こうした言語機能の差異を検証する上でも、明確な対比を成す小説と演劇の両者を分析対象とする意義は大きい。小説を読む／書くという基本的に個人的な経験と、協同作業を前提とする演劇の共有体験という、生産と消費の形態の違いもまた両ジャンルの文化・社会における存在様態を探るうえで、有益な知見を提供する。さらに、「内部と外部」、「物語」という本論文で繰り返し言及される事象や概念は、文学的表象における時間と空間のあり方を念頭に置くものであり、多様なものの空間的・時間的関係性を精査する上で、小説と演劇は有益なテクストの比較分析対象として機能する。そして、その機能はジャンルによる異なるアプローチ、あるいは逆に差異を超えて共通する要素の抽出・分析により、議論の立体化、具体化に大きく貢献するものである。

以上３点が本論文の特筆すべき特徴である。ただ、論文審査のプロセスで課題が指摘されたのも事実である。まず、本論文の研究対象となった1985年以降のアメリカ文学という年代的区切りの妥当性についてである。つまり、1985年以前と以後のポストモダン文学の明確な差異の立証が困難であり、1985年以降の演劇における多様な表象形式を「内部からの批評」で一般化することの妥当性と、冷戦終結という世界的なパラダイムの大転換期の観点から1985年を分水嶺とすることの妥当性に対する再考の必要性が指摘された。また、小説と演劇の表象形式の比較検討が「内部からの批評」という方法論で完全にはまとめ難いとの点に加え、外部の不在したポストモダン状況という認識を示しながら、やはり内と外の二元論モデルを前提に「内部からの批評」が構築されているのではないかという意見もあった。

しかしこれらの問題は、1980年代後半以降の小説と演劇にまたがる現代アメリカ文学に関する「表象の政治学」研究という本博士論文の野心的研究成果の学術的貢献・意義を全く減じるものではなく、

さらなる研究の進展を期待する助言に他ならない。過去から現在に至る膨大な量の文学文化研究、批評理論の精査・検討と柔軟で的確な援用により、斬新かつ高度なメタ批評言説を打ち出した本論文の学術的貢献度は極めて高い。本論文のすべての章の議論が、審査を経て日本英文学会、日本アメリカ文学会の全国大会を初めとする学会で口頭発表され、*The Journal of the American Literature Society of Japan*、あるいは『アメリカ文学研究』等の学会機関誌に掲載されたほか、貴志雅之編『二〇世紀アメリカ文学のポリティクス』（世界思想社、2010年）に所収されている。こうした事実は本研究の学術的認知の証左となるものである。

本論文は、ポストモダン・アメリカ文学の「表象の危機」が叫ばれて久しい現在、文学の表象問題を正面から見据え、多岐にわたる学際的知見と文学・文化研究の成果に関する圧倒的な量の知識に裏付けされた「内部からの批評」という新たな「表象の政治学」のあり方を打ち出した。本論文の鋭い問題意識と斬新な研究目的と方法論、そして研究構想の雄大な射程は、現代アメリカ文学のパラダイムに新たな方向性をもたらすともに、今後のポストモダン文学文化研究の新領域を切り拓き、多大な学術的貢献を果たすものとして大いに評価できる。

以上を総合的に判断し、本審査委員会は、本博士号請求論文が、博士（言語文化学）の称号を与えるに相応しい業績であるとの結論に達した。